

早稲田大学
図書館新編 「露文図書所蔵目録」の完成

西 村 庚

かねてから早稲田大学の図書館には、創立以来八〇余年のあいだに購入、寄贈あるいは資料交換等の方法により収集した露文図書が数万冊に達しているといわれていた。そしてその中に含まれる故片上伸教授の遺蔵書の如きは庄巻中の庄巻であるとしてその評価は高く伝えられていた。しかしこれまで同館の露文資料については集大成された蔵書目録を欠いていたため、多くの場合同館備付のカード目録を利用する以外に方法がなく、従ってカード目録の利用を閉ざされた局外者が資料の全貌をつかむことは容易な業でないとしていた。

幸いにも、今回同同学図書館の多年にわたる努力がようやく実を結び、学園創立（一八八二）より現在（一九六五）にいたるまでのあいだに収集整備された露文資料約一万五千点が一本の冊子にまとめられ、「早稲田大学図書館洋書目録露文図書篇第一編、明治一五年〜昭和四〇年」（一九六六年刊）として上梓され

た。これはわが国における明治・大正・昭和期にわたり苦難の道にみちたロシア研究の一斑を示す金字塔としても後世に永く記念さるべきものであり、まことに慶賀の至りに堪えない。

*

由来わが国において、露文資料の所蔵目録は使用文字や利用頻度等の関係から印刷本として刊行される機会に乏しく、刊行されても収録件数が少ないため利用頻度が低く、排架されたまま書庫に空しく埋もれているのがつねとされていた。今次大戦の最終期まで露文資料を大量に所蔵する大手筋として自他共に許していた満鉄の力をもってしても、「アジア文庫図書目録」（北鉄接収により収蔵した露文図書目録）と「満鉄図書館所蔵露文資料目録」が刊行されて脚光を浴びたにすぎなかった。

そのほか東亜研究所、外務省、軍部諸機関といえども、大半の場合備付のカード目録が資料検索上唯一のツールとされ、

稀に蔵書の一部を関係機関誌等に所蔵目録として分割掲載した
ものや洋書目録の一端として発表したこともあるが、その集大
成はついに果たされなかった模様である。

早大図書館による最初の露文資料所蔵目録もやはりこの範疇
に属するもので、今を去る半世紀ほど以前に簡単な目録が洋書
目録の添え物として刊行されたことがあった。それは大正一一
年三月末現在の所蔵資料にもとづき「早稲田大学図書館洋書目
録第一編付録露文資料目録」として同年九月付をもって刊行さ
れたが、二四ページにまとめられた冊子目録は所収件数にも限
度があり、世上の関心をつよく惹くにいたらなかった。

しかもロシア関係のこれらの研究機関や団体は、早大図書館
および外務省等の若干機関を除いた過半数が終戦を契機として
廃絶され、所蔵資料の一切が焼失または散佚の憂目に遭い、苦
心の作になる蔵書目録は忽ち実体を伴わぬ有名無実の書名目録
と化し、風袋だけの参考文献目録に転落せざるをえなかった。

二〇ページ余の付録目録でこそあれ、実体の亡失を免れた早大
図書館の露文資料目録はその後増加資料が逐年蓄積されると共
に所蔵目録として増補改訂版の刊行がつよく要望されていた。

戦後にいたり、最初に露文資料所蔵目録の刊行に着手したの
は国会図書館であった。まず昭和三四年四月に「国立国会図書
館洋書速報ロシア語図書特集第一号」が刊行され、その後支部
図書館東洋文庫の所蔵資料を含めた露文資料目録が不定期に速
報され、現在につづいている。ついで翌三五年には「播磨文庫

目録」(一、二〇〇点収録)が単行本として発行された。

その他には北大スラブ研究室、東大社会科学研究所における
図書室ないし資料課の編纂になる露文蔵書目録が発刊されてい
るけれども、いずれもガリ版印刷の応急措置のうえ、総合的連
絡もとれていなかったので記載事項や排列にも統一性を欠き、
利用上の不便は利用頻度にも影響が現われていた。

また最近にいたるや、世界各地の日本研究ブームやソ連邦に
おけるシベリア・ブームを反映して、露文資料を抱合せにした
洋書目録が刊行されはじめている。国会図書館の「日本関係欧
文図書目録」(一九六三)について北大図書館の「北方関係洋
書目録」(一九六六)等若干の蔵書目録が指摘されるが、どの
目録を見ても主題別目録として何等かの特定条件に制約されて
いるので、一目録当り一〇〇〜二〇〇点程度の露文資料を発見
できれば上乘と見なければならぬ。

*

これに反し、今回の早大図書館による新版露文図書所蔵目録
の刊行は巻頭のはしがきにも示されているように、

「本目録は大正一一年三月末現在の所蔵露文資料を本館洋書
目録第一編巻末付録として発行したものに、その後逐年増加
した収蔵資料を加え、昭和三四年にいたり本館所蔵の露文図
書全般に対し再整理と再編成を企て、初めて一冊にまとめて
露文資料目録として新たに刊行されたものである」

と、装いを改め、再発足に踏み切った意図が明らかにされてい

る。

目録の所収資料約一万五千点、B5判、四三一ページという
龐大な露文資料目録は、従来その比を見ないほど充実したものである。従ってこれを大正一一年に刊行された洋書目録の付録
篇に比較すると、多少の重複分を含むにせよ、収録件数におい
て十数倍の内容をもち、まことに隔世の感が深い。資料の排列
は著者名順によって行なわれているが、点数が多いだけに索引
があればといいたいところである。所載事項は概して著者名、
書名、巻数、ページ数、サイズ、発行地、出版者名、刊年の順
に統一され、略記号は一括して巻頭に表示されている。

そして稀覯本、豪華本と思われる九二点に対してこれを特別
図書扱いとし、請求番号の下に「特」印を添えてその所在を明
らかにしている。さらに理工学部所管の露文資料に対しては、
「理工」の文字を請求番号に添えているが、その合計は二六六
点に達している。理工関係の図書は概ね一九五〇年代以降のも
のが多く、現在のソ連邦における刊行状態からいえば数倍に上
る資料の収集が予想される。従って今回の新編目録を第一編と
した意図も今後における急激な資料増加の必然性に第二編以降
において対処せんとした措置だともいえよう。

しかし露文資料だからといって、必ずしもロシア版やソビエ
ト版だけに限られたわけではない。ベルリンもあればパリやソ
フィヤ版もある。稀に上海版や横浜版、ハルビン版を発見する
ことがあり、入手ルートの煩雑さがしのばれる。ソ連邦内におけ

る発行地はモスクワ、レニングラート（ペテルブルグまたはペ
テログラード）のものが圧倒的に多く、地方都市ではキーエフ、
ハリコフ、カザン、タシケント、タリーン、ワルジャワ、ノボ
シビルスク、ハバロフスク、ウラジボストック等シベリアない
し極東僻地にまで及んでいるが、その数はあまり多くない。ま
た著者が明らかでなかったり、不確実な図書および論文集、年
鑑類、叢書物、雑誌類は書名をもって著者名に代え、書名から
でも検索できるように編纂されている。

*

本目録を一覧して最も目につくのは、文学系統の資料が圧倒
的に多いことである。これはロシア文学の研究を建学の精神と
した早大露文科の伝統にもとづくものが多いと思われるが、故
片上教授の遺蔵書ではないかと思われるものを間々散見するた
びに、博士の影響力の偉大さに心打たれるものがある。

量的に多いのはなんといっても新旧科学アカデミー版の学術
資料である。もちろんその中には僅かながらも旧ロシア帝国科
学アカデミー版の貴重な資料が含まれていることはいうまでも
ない。現代ソビエトの科学アカデミー版になると、終戦直後の
ものは極めて稀でほとんど一九五六〜七年以降の出版にかか
るものが多い。ついで最近版になると、加盟共和国（ウクライナ、
アゼルバイジャン、アルメニヤ、グルジャ、キルギス、カザ
フスタン、リトアニア各共和国等）の刊行物が交錯しはじめ、
資料源の幅が一段と広く且つ厚味の加わってくるのが感じら

れる。なおカザフ共和国の科学アカデミー版のものが目立って多いのは、交換資料が含まれていることを示しているのではなからうか。ともあれ最近数年間にわたり資料収集の範囲や対象が急速に拡充され、収集成果向上のためあらゆる努力がつけられていることが如実に看取される。

量的にも質的にも最も信頼のおけるソ連邦科学アカデミー版の出版物としては、モスクワ、レニングラードの各中央図書館編纂のものをはじめ、アカデミーの系列下にある植物学、動物学、鉱山学、史学、文学、唯物文化史、自然科学史、芸術史、東洋学（アジア諸民族研究）、スラブ学、古文献学、ロシア語学、シベリア及び極東地理学等の各研究所や実験所、付属博物館以下、植物園、動物園等の編纂になる「紀要」「報告」「年報」、単行本等四〇〇〇点に近い資料が網羅的に収集されている。年代的にいえば、入手ルートの関係によるものか、一九五〇年代以降のものが圧倒的に多いが、終戦後における日ソ間の冷戦時代から親善関係への移行期以後のものが歴然として目につくのは感慨深いものがある。一点当りの大量の資料としてはロシア作家の全集ないし選集、著作集のほか「レーニン全集」（三八巻ものと四九巻もの）、「古文献学集」（一二三巻）、「アジア諸民族研究所小報」（八一巻）、「人種学研究所小報」（八七巻）等が注目される。少し古いものではセミノフ・チャンシャンスキーの監修になる「景観ロシア」があり、これについては国会図書館の所蔵資料とコピーの交換も今後へのこされた有意義

な課題だと思った。

数多い文学作品の中でも旧ロシア作家の作品として豊富にとり揃えてあるのは、L・トルストイ翁のもので、これについてはプーシキン、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、アンドレーエフたちの全集や著作集があり、旧ロシア版はもちろんソビエト版も一応揃っていて壮観の一語につきる。量的に少し劣るが、ゴリキー、ゴンチャロフ、ゴーゴリ、クープリン、ダニエフスキー、アルツイバーシエフ、ガルシン、ゴルブーノフ等の作品も各種の版が蒐められている。ソビエト作家としてはシヨロホフの「静かなドン」や「開かれた処女地」のほか二、三の作家のものがあるくらいで、収録点数は意外に少ない。これは、文学部の露文科で、別個にソビエト作家の著作を蒐集しているの

で、本館では、重複することを避けているためであろう。極東地誌関係としてはブルジェワリスキーの「ウスリー地方旅行記」（一八七〇）や「ザイサン湖から黄河源流へ」（一八七三）の原本につききオブルーチェフの「シベリア旅行記」（一九六三）、「キャフタからクリジャへ」（一九五〇）のソビエト版が特に目についた。

図書館関係ではレーニン図書館関係のものが一番多く、年報あり、単行本あり、単行本には同館の各種カタログや図書館学関係の資料が豊富に収録されている。これは入手ルートとして資料の国際交換制度が比較的早くから開けた関係も寄与しているらしい。これについてはソ連邦科学アカデミーの図書館関係

のものが目立つ。書誌関係ではソ連邦書籍院の刊行物も一応揃っているので看過できない。

特に発行紀の古いものとしては、ライヘリの「日本国家小史」(一七七三)、仏人ポーマルシェの「フィガロの結婚」の露訳本(一七八九)「中等学校用新編ロシア帝国州県別アトラス」(一八〇七)、デルジャービンの「ヘロデスとマリアンナ」(戯曲五幕、一八〇九)等がそれぞれ特別本に指定されているのが注目された。その他ゴロヴニン中佐の「日本幽囚記」(一八一六)の原本が特別扱いをうけている。シーボルトの「日本旅行記」(露訳本)とゴンケビッチ・橘耕齋共編の「和魯通言比考」(一八五七)は定評のある日本関係の資料だけにすぐ目についた。またゴロヴニンが函館幽囚時代、幕府の通詞村上貞助が、ロシア語修得のためゴロヴニンの補習をうけたといわれる「小学算術入門書」も収録されているが、これには「大黒屋光太夫将来書」という注記があり、「特一印扱いにされている。なお前記「和魯通言比考」につき、露都における日本人の編著として黒野義文(一九世紀末葉より革命直前までペデルブルグ大学の日本語講師)の「露和通俗会話」(一八九四)が収録されていることはあまり日本にも知られていないので、本稿を借りて紹介しておく。

軍部関係の資料で目についたのは、「モールスコイズボールニク」誌と「海軍法規集」である。「モールスコイズボールニク」誌は一八四八年ロシア海軍省の月刊誌として露都に創刊、十月

革命前まで続刊され、その後は赤色海軍の機関誌に改組改題されたものだという。わが国ではゴンチャロフの「日本渡航記」を含む「世界周航記」が最初に掲載された海軍雑誌として知られている。極東ロシアの海軍事情にも触れた記事が多いというだけに是非一覽してみたいものである。なお国会図書館の播磨文庫には一八五〇〜六〇年代のものが所蔵されているので両者を併読すれば、日露交渉史に関係ある興味深い資料がえられるかもしれない。海軍法規集は二四巻もので、ロシア海軍の教育関係や組織内容に触れたものらしい。

百科事典類には旧ロシア版の「ブロクハウス百科事典」(七四巻、一八九〇―一九〇三)と「グラナート百科全書」(第七版四一巻)をはじめソビエト版の「大百科」の第二版(五二巻、一九四五―一六〇)、と「小百科」の初版(一〇巻、一九二八―三一)、同三版(一一巻、一九五八―六一)がある。小百科の第二版は発行が第二次大戦の直前より戦中に跨っていたので入手が不可能であったのだろう。大百科の初版を欠いているのもこれとはほぼ同様の理由によるものと思われる。

辞典類も帝政時代のもは「教会スラブ語辞典」(四巻)、ダール露語辞典(四巻、原本、一九一二)、同ソビエト版(一九五五)を揃えているほか、科学アカデミー版の定評ある各種部門別辞典、民族語辞典が豊富に揃えてあり、根強い収集意欲は称賛すべきものがある。しかしソビエト版でも戦前版になると、土露辞典等隣接諸国の異民族語辞典が意外に少ないのは当

時の入手ルートの狭隘性と脆弱性に由来するものであろう。

豪華本としてはエルミタージュの図版入り解題書が新旧両版をとりまぜ一〇点近く「特」扱いにされているのが目立つ。

日本関係資料としてはやはり文学作品の多いのが注目される。科学アカデミーのコーンラッド教授をはじめ、フェリドマン、ピヌウス、リーボワ、マルコワ等の女流翻訳陣の名前が再三、本目録上に現われてくる。主なるものに、巖谷小波の「日本昔噺」(ベルリン版)、夏目漱石の「心」(一九四三)、「坊ちやん」(同)「吾輩は猫である」(一九六〇)、菊地寛の「恩讐の彼方へ」(一九四一)、有島武郎の「或る女」(一九二七)、石川啄木の「短歌集」(一九五七)、コーンラッド訳の「伊勢物語」(一九二五)、「小林多喜二選集」(一九五七)、木下順二の「蛙の昇天」(一九五九)、芥川竜之介(同)等があり、戦前のプロ作家への一辺倒を見事に脱皮した最近の傾向は注目される。

歴史ものや経済ものも、最近の日本研究ブームを反映して質量共に優れたものが収録されているが、D・M・ボズドネーエフの「小学日本歴史」(一九〇六)と「日露交渉北日本史料第一」はやはり関心を惹く資料の一つである。このほか、新しいものとしては、大河内一男等編の「日本労働階級」(一九五九)、コンスタンチノフによる「魯齊亜国睡夢談」(一九六一)の翻訳と解説、服部之総の「物語—日本の労働運動」(一九五九)が注目される。

支那、朝鮮、東南アジア関係の資料も最近版のものが多少収

録され、「聊齋志異」(一九二三)のほか、茅盾の「文集」(二三卷、一九五六)、「東省雜誌」(一九二六—七)を見るが、これはむしろ今後の第二編以降において収録が期待されるべき分野となるのであろう。

*

本目録に対するあらましの雑感は以上のとおりであるが、最後に一つ筆者の希望を添えて擲筆したい。それは本目録の刊行を契機とし、まず各地における露文資料所蔵機関の目録作成への奮起を促すと共に、さらに進んで全国的総合目録の集大成の一日も速やかならんことを念願して止まない点にある。ことにソ連邦においても、帝政時代の古文獻は年と共に散佚亡失の懸念があるので、わが国においても早くから資料の所在を把握しておくことは最も意義あることと思われる。

(元国立国会図書館司書)

早稲田大学図書館洋書目録

露文図書篇 第I編

B5判 並製 本文四三一頁
実費頒価五〇〇円 下九〇円